

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	東邦大学健康科学部 第1回実習協議会報告
作成者（著者）	2017年度教務委員会・FD委員会
公開者	FD 委員会 研究推進検討会 (東邦大学健康科学部)
発行日	2018.06.30
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 1(1). p.73 74.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	資料
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD81568424

東邦大学健康科学部 第1回実習協議会報告

2017年度 教務委員会・FD委員会

I. 企画趣旨

平成29年開学初年度の1年次は、入門実習Ⅰ（高齢者施設）、入門実習Ⅱ（病院施設）の実習を開始した。平成30年度は看護実践の基礎、臨床実践Ⅰ、老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが開始する。文部科学省の看護学領域の在り方に関する検討会においても「実習受け入れ施設との連携を図り、教育の基盤づくりに努める」とされ、臨地実習の基盤づくりに向けて本学部の特徴と実習施設の状況に応じた方法で、実習施設との連携を充実させる必要がある。実習協議会は多くの実習施設が一同に介する場である。リラックスした雰囲気の中、私たちの後輩となる看護学生を育成するために、それぞれが大切にしたいことについて話し合うことを通して、学部と施設の相互理解と連携のあり方を深める機会としたい。

II. 日時・場所

平成29年12月7日14時～17時

習志野メディアセンター内（マルチメディアスタジオ・Group Learning室）

III. 参加者

実習施設21施設、44名

健康科学部教員12名

IV. 内容

1. 大学側からの情報提供

- ①健康科学部に終える教育の特徴
- ②臨地実習の位置づけと4年間の計画
- ③入門実習Ⅰ・Ⅱのまとめ

2. 本学各領域の特徴と大切にしたい教育方針

- ①トランスレーショナル看護領域
- ②ファミリーヘルス看護領域
- ③コミュニティヘルス看護領域

（第1回教育ワークショップ報告参照）

3. ワークショップ「臨地実習をする上で大切にしたいこと」ワールドカフェ方式

1) ワールドカフェの趣旨：本実習協議会は多くの実習施設が一同に会する場である。私たちは、学生の臨地実習の基盤作りとして、本学部の特徴と実習施設の状況に応じた方法で、実習施設との連携を充実させることが求められている。私たちの後輩となる看護学生を育成するために、実習施設の立場から、教員の立場から、それぞれが大切にしたいことを話し合い、共有することを通して、学部と実習施設の相互理解と連携のあり方を模索する機会としたい。

2) ワールドカフェとは、リラックスした雰囲気の中で、少人数に分けたテーブルで自由な対話を行い、他のテーブルとメンバーをシャッフルして対話を続けながら、参加する全員の意見や知識を集めることのできる対話手法の一つである。ワールドカフェの効果として、話しやすさを生み出す、発言の機会が増える、参加者全員の意見が集まる、参加意識が高まり満足感が得られる、人がつながることがあげられる。

3) タイムスケジュール

第1ラウンド30分（テーマについて探求）

第2ラウンド20分（アイディアの他花受粉）

第3ラウンド10分（アイディアの他花受粉）

第4ラウンド10分（元のテーブルでの統合）

全体シェア・まとめ20分

4) ワールドカフェのエチケット

- ・リラックスして対話を楽しむ
- ・話をよく聞く
- ・質問して広げる
- ・否定しないで、受け止める
- ・全員と対話できるように一回の発言は短めに
- ・アイデアや思いついたことを書く！
描く！つなぐ！
- ・テーマにフォーカスする

5) 問い：あなたが臨地実習指導において、大切にしたいことは何ですか？

6) 問いに対するグループのまとめ

1G：雰囲気作りを普段から意識していきたい。教員との連携を強化していきたい。学生の生活やお互いが持っているものを共有して、実習を行っていきたい。

2G：語れる環境が必要ということが話題に昇った。学生も語り、指導者も語る。言葉だけでなく、態度で語る。語るためには、指導者は語る内容を持っていなければならない。語る能力を磨くために人としてのスキルを磨くことが大事となる。学生のありのままを承認できるという柔軟な態度が必要である。

3G：いろんな話題の中で、いまどきの学生という言葉が出てくるが、いまどきというのはどういうことなのかについて話をした。結論としては、看護は変わらない。看護の仕事は楽しいと思えるように学生を導きたい。もう1つの話題は、看護に進む学生には多様性が見られるため、そのことを十分に理解したうえで、指導していく必要がある。

4G：看護が楽しいと思えるような実習が一番重要である。楽しい実習とは何かについて話し合った。自分の立場で努力した結果を認めてもらえること、いろんな体験の中から成功体験を積んでいき承認を受けること。その体験が自主的に学修していくことに繋がる。学生が自主的に学べる環境を整えていくことが重要である。コミュニケーションについては、学生と教員間だけでなく、看護師とのコ

ミュニケーションが重要である。感性も重要であり、感性を崩さないようにしていきたい。

5G：教員との連携について、楽しい実習について話し合いがされた。このグループで一貫した話題は、学生がやりたいと思うことを実施させてあげられる実習にしたいというテーマであった。教員側からは、技術について学生も実施したいし、実施させてあげたいが、技術の勉強をしない状況で行うことはいつまでも間違っただけとなる懸念が出された。病棟側としては、学生が希望する技術を実施するためには適切な患者を選んだり、成功体験を次につなげたり、いまどきの学生という特性をうまく使って学生に行わせてあげたいという意見が出された。学生の中には看護師になる気がなかったり、患者にまったく興味がないという学生もいる。病棟側の出来るだけ実施させてあげたい気持ちを知ってもらうことで、学生も少しは成長して次はがんばろうということになるかもしれないという意見が出された。

6G：コミュニケーション力をつけていくことが大事である。看護師に唯一残される仕事は人間にとって大事なことである。そのため、病棟側も教員側も体験することが大事であり、実習で体験できることを重視し、教育のレベルを保ち、教員との連携を図りながらよりよい実習をすすめていきたいという意見が出された。また、実習は、目指すナースを見つける場であり、重要であるという意見が出された。

7G：実習環境を大切にしていきたい、学生の思いや考えを大切にしていきたいという意見が出された。臨床と教員の関係性について、普段から良好な関係性を築いていきたい、看護観の育成のために実習で成功体験をさせてあげたいということが話された。